

明恵における宗密の円覚教学への受容について

胡 建 明

一 はじめに

日本仏教における宗密教学の影響を追究するとすれば、鎌倉時代初期の高山寺明恵（一一七三—一二三二）に言及されねばならないと思うのである。

明恵が生まれた時代は、旧い社会体制、とりわけ奈良、平安朝以来の貴族社会は、次第に新興の武士階級中心の社会に入れ替わる、所謂古代から中世への転換期である。明恵は華嚴宗祖師の学説を中心としての伝統を継承しながらも、新たな思想領域の探索をも試み、特に中国宋代仏教の影響によって形成し、そして急速に展開しつつあった鎌倉新仏教にも熱い目線を向けた。その中で特に禅宗、浄土宗等の実践思想に刺戟され、特色のある実践的な華嚴思想体系を構築したという点で、華嚴思想史上では特筆すべき人物である。

本論は、特に明恵における宗密の円覚教学への受容に注目しながら、論じてみたい。

二 明恵に及ぼした宗密の円覚教学の影響

明恵における宗密思想の影響に就いては、主に『略疏』と『道場修証儀』等の著作からのものである。特に宗密の『略疏』、『略疏鈔』、『大疏』、『大疏鈔』等著述からの引用が多くあり、「頓悟漸修論」については周到に論述している。

喜海の『伝記』巻上に建保三年（一二一五、四十三歳）の条では、

同年四月に、梅尾の西峯の上に一字の庵室を構へて練若台と号す。その後の北に三段計り下りて谷の庵を結びて、一両の侍者爰に栖む。この庵に栖み給ひし比、学生七八人烈（列）参して、『円覚経』の圭峯禅師の『略疏』四卷、上人に対して之を談ず。上人この次に自筆を以て彼の疏に点を加へらる。殊に『円覚』の「普眼章」の尋思如実の観乃至三重法界観等により結業禅誦す。この練若台に住み給ふ事三ヶ年に及ぶ。然るに山高くして嵐風烈しく、涯嶮しくして雲霧覆ひ、室内湿氣し牆壁破却せり。上人此に依りて頭痛の煩ひあり。仍りて是を栖み捨てて石水院に移り給ふ。是にお

いて又『円覚経』の『略疏』并に『修証儀』是を談ず。又『梵網菩薩戒本』香象の疏并に南山の『淨心誠観』等之を談ず。⁽¹⁾

と記している。ここで明恵は梅(梅)尾の西峰にて小庵を構え、号して練若台といい、そして弟子たちに宗密の『略疏』四巻を講じ、それと同時に宗密の疏に点注を入れた。さらに『円覚経』での「普眼章」を以て観行を修し、また三重法界観等の観行を三年あまり修した。その後、山が高く、風が烈しく、霧が深く、空気の湿気が強かったため、明恵は頭痛を患い、遂に山の下にある石水院に移った。引き続き弟子たちに『略疏』と『道場修証儀』及び法蔵の『梵網菩薩戒本』や道宣の『淨心誠観』等を講じた。

明恵は宗密の『略疏』の外に、さらに実践的な著作である『道場修証儀』にも着目している。また『略疏鈔』、『行願品疏鈔』⁽²⁾、『孟蘭盆経疏』⁽³⁾などの著作についても研究したことも窺える。

たとえば『明恵上人行状』等の史料では、建保二(一二二四)年十二月七日に『持経講式』⁽⁴⁾を撰述し、同三(一二二五)年三月十八日から九月二十二日まで『略疏』⁽⁵⁾を講じ、同四(一二二六)年『略疏鈔』と『道場修証儀』⁽⁶⁾を講じ、同年十一月三十日に『略疏』に点注を加え、承久二(一二三〇)年『略疏鈔』⁽⁸⁾を講じたと記されている。

さらに喜海の『伝記』巻上の承元二年の条では、

明恵における宗密の円覚教学への受容について(胡)

又『円覚経』三観二十五輪の方軌に依りて円覚性を観ずるに、その好相を得る事あり。⁽⁹⁾

とある。明恵は承久二年以降、宗密の『円覚経』諸疏で開示されている観法の代わりに、李通玄が提唱した仏光観を実践し始めた。然るに『円覚経』の研究を晩年まで怠ることなく、その示寂の二年前の寛喜二(一二三〇)年九月十五日の授戒会でお宗密について言及されている。⁽¹⁰⁾

また明恵の『三時三宝礼釈』では、

圭山大師の『円覚鈔』に曰く、華嚴に仏恩の深き事を説くを見るごとに又みづから法を聞く即ち仏恩を感じる事を喜ぶ。又云、華嚴に深く諸仏菩薩の多劫苦行して大法を弘護し衆生を哀愍するを見て又大教の義味無辺なる事を悟る。釈迦跡をくだして此門をとくにあらずば吾何によりてか此地の到ることを得る。是故に所感の恩いよいよ深く弥厚しといへり。⁽¹¹⁾

と論じている。明恵はさらに宗密の『略疏鈔』巻二の中で、『略疏』序文部分の復注した内容を援用している。

疏、弥感仏恩者、弥者、是甚深之義、謂未講『華嚴』已前、或因転読或聴聞、毎見経文説仏恩深、又自慶聞法已感仏恩。今因再逢善友、親講華嚴宗部、深見諸仏菩薩多劫苦行、弘護大法、哀愍衆生之跡、又悟大教義味无边、若非釈迦降跡出現演説此門、而我何由得至此地、故所感恩弥深弥厚。⁽¹²⁾

明恵は右記した疏鈔の引用から見れば、彼の宗密思想研究は頗る深いものがある。但し明恵の思想的立場から言えば、

明恵における宗密の円覚教学への受容について（胡）

あくまでも宗密の円覚思想を華嚴宗の観法の中に円融する為である。明恵が宗密の『円覚経』諸注釈を重視した理由は主に二点ある。

一つは明恵が宗密を華嚴宗の祖師の一人として崇めて、彼の『円覚経』思想を華嚴思想として吸収する点。

もう一つは明恵が教理と実践との融合を重視し、宗密の提唱した「本来成仏論」と「頓悟漸修論」について非常に魅了された点である。

彼が華嚴観行を徹底的に貫徹したことに關しては、宗密の思想からの影響が実践的に大きな意味をもったに違いない。彼の『持経講式』では『円覚経』や、『華嚴経』の「十無尽藏品」、「如来出現品」という三部の経文を受持する重要性を強調し、その不可思議功德と利益を賛歎したのである。その中で殊に『円覚経』に關する論説が最も多く、宗密思想の理解と吸収に尽力したことが指摘できる。その中の一文を見てみよう。

三部経王よ、次での如く、三生成道の正因なり。まず『円覚経』は、見聞の業と為す。十眼中の観法性眼をもて円覚性を見、本来成仏の妙義を信ず。十耳中の菩薩道耳をもて円覚の義を聞き、歡喜奇特の心を起す。経に云ふが如し、「始めて知る、衆生本来成仏す、生死涅槃は昨夢の如し」と。圭峯大師、（中略）即ち判じて円教の旧来成仏と為すなり。

ここで、明恵は宗密の「本来成仏義」と華嚴円教の「旧来

成仏義」について、言葉が異なってもその義は同じだと述べている。つまり衆生が本具する円覚性と仏の本覚とは非一非異の關係であり、始覚と本覚が同源として、因位と果位の違いがあっても、その覚体の本質は同じであるという。すなわち「始めて知る、衆生本来成仏す、生死涅槃は猶お昨夢の如し」という経文の所説である。明恵は宗密の「頓悟漸修」の実践思想を以て、華嚴教が所説する「三生成仏義」を解釈し、その修行の機要は、まず『円覚経』に示された「見聞為業」という観行を明らかにした。これに就いて、さらに明恵は左記のように述べている。

一『円覚経』初心頓悟離四病事。经文所離四病○初心に円覚性を了悟して、観じて入る時、功用を齊仏。故に四相等の病を離るる也。普通に陀るま（達摩）宗など云て此観門を修する人、性相をわきまえず、直ちに観に入らざるの時、一切善惡の法に所作施為を息め、諸行を發無して急に到たる思は是は僻事也。円覚性は諸分別念相無き故に、是を觀する時に諸分別善惡之見を留む此性に順ずる也。さて出觀の時も一切時にこの性に向て、故に諸善は此性に順ずれば諸善を修し、諸惡は此性に違すれば諸惡を留むる也。是を三觀之中の三摩はちの行とも云也。此くの如く、一切円頓の教文のくせ初心にまづ本有覺性を了性（承？）して、功用、始終を兼ね果位に同ぜしむる也。故に始より四病をのぞけ四相を離せよと云也。（中略）故に今經に初心頓悟の義を説て用心を仏に同ぜしめ、この用心有るの人、即ち生死をば昨夢の如くに思ひ如幻衆生を見れば同体大悲起る故に三僧祇を経、経歴生死する也。

(中略)一切理教の習いて後位を初心に引越して置く。今經の始めに「文殊章」に了悟覺性發菩提心と云也。⁽¹⁴⁾

ここで、明恵は『円覺經』の中での「円覺性」と「本来成仏論」と達摩禪と関連して論じ、性相を明らかにできず、一切善惡の法を為さずして即ち成仏が出来るという禪門での偏狭な見解を批判した。成仏は必ず三僧祇劫の薰修を経、そして初心から始めて覺性を悟り、頓に菩提心を發することが大切であると論じている。明恵は宗密の「頓悟漸修論」を自らの華嚴觀行と結合し、華嚴經の「初心頓悟義」を以て、「生死即涅槃」を悟り、同体の大悲心、菩提心を起こし、漸修によつて四病を除き、四相を離す。これは宗密の思想理路と一致しているのである。

明恵は早年神護寺において、密教を学んだので、彼の華嚴觀行の中には濃厚な顯密一致の思想傾向が現れていることが、その仏身觀、即ち法身說法などの観点から見られる。明恵の『解脱門義聽集記』には、

而を宗密等の御意、法報不分の身と云て、自受用身と法身と合する身あり。即ち『円覺』等の諸經、理智不分の身を以て淨土の中に在て法を説く經ありとて、『円覺經』、『大毘盧遮那經』、『密嚴經』、『仏地經』等とて、あまたの經を出せり。『円覺經』の於不二境現諸淨土と云は、不二境は凡聖不二、淨穢不二、身心不二等の境の中に於て土を現じ、法を説く。其身は即ち内証に約すれば自受用身也。他の為に法に説けば、他受用身也。法報不分と云は即ち自

明恵における宗密の円覺教学への受容について(胡)

受用身を以て法身に合して真身とす。⁽¹⁵⁾

明恵が援用した「『円覺經』の於不二境現諸淨土」や「法報不分」云々の句は、宗密の『略疏』⁽¹⁷⁾によるものである。即ち明恵は『円覺經』の教主を法身と報身と合する「真身」として看取し、明らかに密宗經典である『大毘盧遮那經』(即ち『大日經』)での大日如来の「法身說法」の教説と同一視されているのである。周知のように、華嚴の教主も法身仏の毘盧遮那仏であり、両教は仏身觀における観点は同じである。日本真言宗の開祖空海が華嚴宗を顯教最高位として崇めたのも、その本尊教主が一致することが主因であろう。然るに、宗密はこれに就いてそれほど強調していなかったが、明恵の宗密思想への理解をさらに外延的に敷衍したものと見受けられるのであろう。

三 結び

そもそも明恵は宗密の円覺教学を重視した主な原因は、恐らく彼がこの經典の「初心円頓之機」という根機説に共鳴したために違いないと筆者は思う。彼はかつて『摧邪輪』と『摧邪輪莊嚴記』を撰して、法然の『選択本願念仏集』で説かれた念仏門を猛烈に批判した。つまり彼は法然が主張した下根劣機の愚人でも、ただ弥陀の本願力(他力)を信じて、一心に念じれば、必ず弥陀の本願力(他力)を得て往生である

明恵における宗密の円覚教学への受容について（胡）

という観点に対して、厳しく異議を唱えた。つまり劣機の衆生は薄福で、慧力も無ければ、解脱法の修行に堪えないと考える故である。明恵の修行観は法然の念仏門と違って、自力的、つまり聖道門を堅持した。その点で宗密の「本来成仏論」や「頓悟漸修説」と明確に合致している。またその「法報不分」という仏身観も、彼の顕密思想と融け合う傾向をも示していると考えられる。

- 1 『明恵上人集』（岩波文庫三三―三二六―一、岩波書店、一九九四年七月、久保田淳、山口明穂校注）一四〇―一四二頁を参照。
- 2 明恵の『自行三時礼功德義』では、宗密の『行願品疏鈔』を引用している、『正新纂大日本統藏經』第七十四卷、一七九頁上と一八一頁下―一八二頁上を参照。
- 3 明恵の『孟蘭盆經講式』では、宗密の『孟蘭盆經疏』を援用している。
- 4 田中久夫の著作『明恵』（吉川弘文館、一九六一年）一〇一頁を参照。
- 5 前掲書、一〇二頁。
- 6 前掲書、一〇七頁。
- 7 前掲書、一一四頁。
- 8 『明恵上人資料』（全五冊、東京大学出版会、高山寺典籍文書総合調査団編集）の第一冊、一九八二年、五七頁を参照。
- 9 『明恵上人集』一四二頁。
- 10 『梅尾説戒日記』（『明恵上人資料』第三冊、一九八七年、

六三五頁上）を参照。

- 11 『正新纂大日本統藏經』第七十四卷、一六二頁下―一六三頁上を参照。
- 12 『大正蔵』第三十九卷、八四〇頁中を参照。
- 13 ニールス・グウルベルク (Niels Gualberg) 「明恵作『持経講式』について」（『大正大学総合仏教研究所年報』第二〇号、一九九八年）を参照。
- 14 『明恵上人資料』第三冊『梅尾御物語』上「年月不明説示」、四〇四頁下―四〇五頁下を参照、また同書「承久二年六月十六日説示」三九三頁上―三九六頁下を参照。
- 15 納富常天が校注した『解脱門義聴集記』（『金澤文庫研究紀要』第四号、一九六七年、一八〇頁）を参照。
- 16 『大正蔵』第十七卷、九一三頁中を参照。
- 17 『大正蔵』第三十九卷、五二八頁下を参照。

〈キーワード〉 高山寺明恵、宗密思想、円覚教学
（駒澤大学佛教経済研究所研究員・文学博士・哲学博士）